

〔共同研究：地域文化財の掘り起こしと活用の研究〕

# 大学の地域貢献を考える

——人文系の文化資源を通して（総論編）

井 上 敏

## 1 はじめに

現在の日本の大学が置かれた状況は経営の面でも、研究の国際競争力の面でも、大変厳しい。これは国立、公立、私立の別なく、それぞれの状況はあるにせよ、厳しいという点では同じであろう。その中で各大学は各々が置かれた状況の中で、求められているものを考えつつ、この世界で可能な貢献を果たすべく、日々研究に、教育に励んでいる。その大学に求められる面として、地域貢献がある。「地域貢献」と一口に言っても様々な貢献があり、一概にこれができるよというものでもなかろう。その点、そこに各大学の研究や教育の面での特色が大きく関連してくるのではないだろうか。特に理系の分野がある大学については地域における新しい産業の創出につながるような研究が出てくれば、現在の日本の状況からしても大きな貢献と言えるだろう。だが、理系学部のない本学ではその点は非常に弱い。一方で本学は文系総合大学であるとはいえ、社会科学系の学部 비해、人文科学系の学生の人気の低さ、そして日本全体の文学部をはじめとする人文系への冷淡さ（国立大学での文学部不要論など）を考えると、今後の人文系の将来は非常に深刻に考えざるを得ない。特に歴史に関わる人文科学の分野（文献史学、考古学、美術史学、民俗学等）において、本学の学生も含めて興味関心が低い学生が多くなってきたことを顕著に感じる。

某学会で一緒した某有名国立大学の先生から学生に「歴史なんて受験勉強の暗記科目でしょ？受験が終わったら、不要ですよ！」と言われた、とため息交じりで仰っていたのを鮮明に覚えている。また筆者も大学院生だった時、学生寮で一緒だった某有名私立大学の学生が「歴史なんて老人がリタイアした後に興味を持つものでしょ？」と言われて、愕然とした覚えがある。更に現在、国立、公立、私立の色々な大学で教える機会をいただいているが、これまでに比べて、歴史系の科目に興味を持つ学生が全体として相当低くなっているのを痛感する。具体的な数字は示せないが、数千人に10人いるか、どうかぐらいの程度にしか筆者自身は感じていない。

その一方で、本学エクステンション・センターでの社会人向けの講座では歴史系の科目

の人気は非常に高い。筆者も担当していて、受講生の熱心さを非常に感じる。また地元大阪府和泉市のいずみ市民大学での講座でも「泉州学」を現在担当しているが、ここ数年は年度の前半（春学期）のみの開講だが、終わると後半（秋学期）も開講しないのか、来年もやってくれるのか、必ず受講生の方から訊かれる。この温度差は何なのだろうか？

筆者は本学では博物館学を教える博物館学芸員課程の専任教員だが、専門は文化財の法や政策を専門としている。近年の文化財政策を研究していると日本の文化財や博物館の政策が観光寄りになってきているのは当然感じているが、更に日本の人口減少による地域の過疎化、そして地域を支える若者の減少を痛感する。また地域の状況に無関心な若者、ましてや自分の住む地域の歴史や豊かな文化資源に興味もない者もかなりいる。そういった中で本学での学びに「人文系」は不要なのだろうか？これだけの人口減少が進んでいる日本で自分の地域の歴史・人文系の文化資源をそのまま埋もれさせたまま、消滅させていいのだろうか？

そういった疑問を抱えながら、それに対する答えを探求すべく、2011年度以来、3年を1期として4期を終え、5期目の3年プロジェクトの1年目を今年より行っている。そこで本稿では2020年度から2022年度まで行ってきた4期目の調査の状況をまとめながら、本学の所在する和泉市を中心に「泉州」と呼ばれる地域、そしてその隣接地域である河内長野市などの地域の文化資源を掘り起こし、人文系の観点からどのような地域貢献ができるのか、また本学の教育に資することができるのかを考察すべく、3年間の活動を振り返っていきいたい。

## 2 3つのエコミュージアムの調査

まずこれまでのプロジェクトで本学の地域貢献として重要な思想であり、枠組みとして取り上げてきたエコミュージアムの調査についてまとめたい。2020年度は残念ながら大会はオンラインでの開催の為、現地見学は開催されなかったが、21年度、22年度は日本エコミュージアム研究会での見学・会合に参加し、21年度には「三鷹まるごと博物館」、22年度には「よこすかルートミュージアム」と「菰まちじゅう博物館」を実際にまち歩きをしながら見学、調査をし、またそれぞれに関わっておられる関係者からの解説、質疑応答も行った。本学の泉州地域への貢献の一つの在り方として「いずみエコミュージアム構想」というエコミュージアムによる貢献の試案についてまとめているが<sup>1)</sup>、日本においては新しいミュージアムというより、地域振興の一つの手段として90年代以降、広がってきた歴史がある。ただそれでも地域おこしだけでなく、エコミュージアムを地域住民との共同の学生の学びの場として、大学の博物館学芸員課程の授業（実習）の一環としても使われている例も出てきた<sup>2)</sup>。

1) 拙著「いずみエコミュージアム構想（仮称）について」『桃山学院大学総合研究所紀要』第41巻第1号 243頁～252頁（2015年7月発行）

2) 神奈川県平塚市の金目エコミュージアムと東海大学の学芸員課程との取り組みがある。このエコ

### ①三鷹まるごと博物館

三鷹まるごと博物館は2002年度から三鷹市が取り組んできたエコミュージアムである。2021年11月7日に見学を行った。当日はJR三鷹駅前のビルの中にある三鷹ネットワーク大学を会場にして、まるごと博物館全体の説明をしていただいた後、モデル事業を展開している大沢の里をまち歩きしながら見学した。

見学のルートは水車経営農家から出山横穴墓群、そしてワサビ田のある古民家を回った。ここでの印象は地元三鷹市という自治体が非常に熱心であることで、日本のエコミュージアム活動でよくみられるが、地域を見せていただいて、やはりそもそも地域の文化遺産や自然が豊かでないという取り組みが始まらないということがよく分かった事例でもあった。

### ②よこすかルートミュージアム

2021年5月から横須賀市が取り組んでいるエコミュージアムである。2022年10月30日に見学した。まずエコミュージアム全体の解説を横須賀市ヴェルニー公園内のティボティエ邸で映像を見せていただいた後、解説をしていただいた。質疑応答の中で、このよこすかルートミュージアムは横須賀市の観光政策の枠組みの中で組み立てられており、特に市長のトップダウンで大きく動いているのがよく分かった。このエコミュージアムは近代化遺産を中心に組まれているが、これらは日本遺産としても認定されているもので、それらをうまくエコミュージアムとしてつないでいた。ティボティエ邸を出た後は逸見波止場衛門 → スチームハンマー（ヴェルニー記念館内） → JR横須賀駅駅舎 → ドブ板通り → 世界三大記念艦「三笠」 → 三笠ビル商店街と解説していただきながら、見て回った。JR横須賀駅の駅舎を見ている段階でかなり時間が切迫してきたため、後半はかなり速足で見ることになったものの、正に日本の近代化、特に軍事面でこの地域には様々な遺産が残っており、それをNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」によって横須賀という地域に注目が集まっている中、市としての観光戦略として進めているのがよく分かった。

### ③萩まちじゅう博物館

萩市には、阿武火山群と呼ばれる独立単成火山群が存在する場所としても知られ、日本ジオパークネットワークにおける「萩ジオパーク」にも指定されている。萩市は、歴史・文化遺産だけでなく、ジオパークがあることから自然遺産も豊かな地域である。そして、ジオパークは、エコミュージアムとの共通点・相違点にも関心が集まっており、この点はエコミュージアムだけでなく、ジオパークの観点から地域振興をみるということにも気づかされた。

萩・明倫学舎3号館にて、初日（2022年11月19日）には「萩まちじゅう博物館」と「萩

---

ミュージアムの調査については2023年11月12日に調査を行ったので、2023年度の調査となり、【23連296】の成果論文として今後、まとめた。

ジオパーク」の全体の説明をしていただき、質疑応答や意見交換を行った。2日目(11月20日)は午前中、笠山ガイドツアーとして、萩ジオパークを実際に歩いて見学した。また午後からは伝建地区にもなっている堀内地区を解説していただきながら、明治維新の舞台にもなった史蹟を中心に見て回った。

萩のまちじゅう博物館では地元住民のボランティアの方々の積極的な貢献がとても印象に残った。やはり地元を支えるのは人であり、エコミュージアムなどが積極的に行われている地域というのは行政と地元住民が良い意味で元気であるというのは共通している。ただ問題はその人や運動が地域でつながっていくかどうか、そしてそれが継続していくかである。その点はやはり今の日本が抱えている最大の問題ではないかということを一層認識させられた。

### 3 地域振興の資源としての文化財、博物館の調査報告

一方で、エコミュージアムでくられた領域において、重要なのはその地域にある資源としての自然や文化遺産である。以下、3年分のプロジェクトでそれら地域の自然や文化遺産、博物館などについて行った調査で、筆者が行ったものの概要をまとめる。尚、すべての調査については触れることはできないが、主要な調査について、どのような目的でその調査を行ったのかをここにまとめる。詳細は総合研究所から発行された本プロジェクトの活動報告として、概要は既に公開されているので、細かい部分についてはそちらをご覧ください。

#### ① 2020年度の調査報告

本プロジェクトの3年間のうち、1年目の2020年度はコロナ感染症拡大の影響でほとんど調査に出れず、2021年の3月に集中していくつかの調査を行った。筆者は和泉市久保惣記念美術館の全国的な知名度を上げていきたいという意味で東京の根津美術館との連携を模索するという点から「源氏絵」の展覧会の調査を行った。また東京都の墨田区にある「すみだ北斎美術館」の調査を行った。この美術館は2016年11月に開館され、その設立の趣旨として「墨田区では、この郷土の偉大な芸術家である北斎を区民の誇りとして永く顕彰するとともに、地域の産業や観光へも寄与する地域活性化の拠点として開設」<sup>3)</sup>されたものであり、昨今の文化財、博物館政策の方向性からしても正に地域貢献も視野に入れた新しい美術館である。この館は地元墨田区の有名人、葛飾北斎を顕彰する意味が大きいですが、このあまりに巨大なこの美の巨人に比することができるのは泉州地域ではなかなか見いだせないが、一方で埋もれている地域の偉人を見出し、その記憶を地域の資源として残していくことの必要性はこの館の活動を調査していて、改めて痛感した。

3) すみだ北斎美術館ホームページ「当館について 基本理念」(<https://hokusai-museum.jp/modules/Page/pages/view/37>) (2023年11月30日最終閲覧)

## ② 2021 年度の調査報告

2年目の2021年度は群馬県立歴史博物館、群馬県立近代美術館を11月6日に調査し、前者の歴史博物館については2022年度にも調査した(2022年6月3日 ※この2館の2年分の調査については③でまとめて触れる)。またこの年は南朝関係の史蹟についての調査(如意輪寺、吉水神社)を行い、改めて泉州を含め、南朝の在った奈良県吉野、そして南朝ゆかりの楠(木)正成がこの泉州地域の重要な資源であることを認識したが、年度最後に行った研究会「楠公顕彰と地域社会」(2022年2月6日実施)では改めて戦前の楠(木)正成に対してのイデオロギー的イメージが現在の日本社会でもなかなか払しょくできていない事実を講師の尾谷雅彦氏や参加者との議論で改めて感じた。また群馬県立の2館だけでなく、21年度は鶴岡八幡宮境内の3つのミュージアムの調査と神奈川県立歴史博物館の調査を行った。前者の3つのミュージアムとは鎌倉文華館鶴岡ミュージアム、鎌倉国宝館、鶴岡八幡宮宝物殿である。2022年のNHK大河ドラマが「鎌倉殿の13人」であり、鎌倉が改めて注目されていたところでの新旧の博物館のそろい踏みであったことで、非常に多くの観光客が観覧していた。鎌倉国宝館(1928年開館)、鶴岡八幡宮宝物殿(1902年開館)は従来から開館していたが、鎌倉文華館鶴岡ミュージアムは旧神奈川県立近代美術館であり、2016年に閉館した後、改装の上、新たに2019年に「鎌倉文華館鶴岡ミュージアム」として開館したものの。この点、前述の研究会(「楠公顕彰と地域社会」)では地元の有志の方々が楠(木)正成をNHKの大河ドラマに取り上げてもらうよう運動しているという話も伺ったが、その点も前述したイデオロギー的イメージのお陰で、なかなか進んでいないということであった。

年度の後半は、「早雲寺一戦国大名北条氏の遺産と系譜」展の調査を行った。早雲寺はその名の通り、戦国大名の北条早雲こと伊勢宗瑞を開基とする名刹で、早雲寺の所在する箱根を含めた霊場、そしてその地の箱根権現に対して歴代の後北条氏の当主が帰依したことで、この地域の豊かな文化資源として今日まで残ったことが調査をして分かった。またこの早雲寺は後北条氏が滅亡した後、一度失われたが、その復興を江戸期の後北条氏の後裔である、大阪の狭山藩の北条家などが関わって行われたことも展示を通して知ることができ、神奈川県文化財と大阪狭山とのつながりも興味深く、今後の南大阪での文化資源を考えていく上で、泉州単独では難しくても、共同で地域の資源として北条氏関連の文化資源を掘り起こして活用していける可能性を得ることができた。

また山口県立萩美術館・浦上記念館や福岡市美術館、伊豆の上原美術館などは和泉市の久保惣記念美術館と同様には個人コレクションの形成、そしてその寄贈やコレクター自らの設立によってできた、あるいは寄贈された美術館であり、地域における文化資源の一つとして、泉州地域のコレクターという視点を与えてくれた。

### ③ 2022 年度の調査報告

3年目となる2022年度はこのプロジェクトの最終年であったこともあり、共同研究のプロジェクトという点で国立歴史民俗博物館の「中世武士団」展に注目した。この展示は考古学、文献史学、美術史学、民俗学、歴史地理学といった人文系の諸分野の研究者による地域総合調査の成果であり、展示を見ても豊かなその成果を描いているものとして大変感銘を受けた。正に人文系の研究成果の結集としてこのような形で成果を出せるということをめざすべきものと改めて痛感した。

また前年度に引き続き、群馬県立歴史博物館については2年連続での調査を行った。2022年には「高崎藩のお殿様－大河内松平家の至宝」展、「戦国上州の刀剣と甲冑」展、2021年には「発掘された日本列島2021」展とそれに関連する群馬県の文化財の展示を調査した。これらの展示の調査によって、群馬県は多くの古墳群を抱える古代史の豊かな地域であり、更には戦国から江戸期にかけての上州が武器生産の一大産地になっていたことなど地域の歴史として掘り起こすと共に、江戸時代には江戸（幕府）の防衛のために多くの譜代大名が配置されていた地域であることから、その二つの時代は特に豊かな文化資源をもつ地域であることを再認識した。また実際に展示を調査することはできなかったが、その後も2023年には「安中藩の名奉行」展なども行われており、群馬県下の諸藩の歴史も掘り起こし、それについて展示を通して県民に伝えるという点で都道府県立の公立博物館の役割というのはこのようにやっていくのだということを改めて認識した。その点では地方の公立博物館として行うべき活動の典型を改めて確認もした。

江戸時代の藩を扱うという点では高知県立高知城歴史博物館でも調査を行った。当初は本プロジェクトとは関係なく、筆者個人の研究活動として高知県下での学会の研究大会に参加して高知県下の博物館を少し見たところから関わりができたのだが、その際に知った高知県立高知城歴史博物館に興味を持って、改めて本プロジェクトの調査として後日（2022年9月4日）に行った（「土佐藩歴代藩主展」を調査）。そして知人を介して同館の大保和己氏を紹介していただき、館の地域貢献についてインタビューを行うことができた。特に高知県下の博物館の設置状況が江戸時代からの歴史も絡んでいる点（山内氏と長曾我部氏との関わり等）など、県外の人間にはなかなか分からないこともご教示いただいた。

## 4 まとめ

このように3年間の調査を行い、本学の地域貢献、教育に資する方法について考えてきた。一つの構想としては既に文章化した「いずみエコミュージアム構想」<sup>1)</sup>がある。つまり桃山学院大学のある和泉市を中心に隣り合う泉大津市や岸和田市等の泉州地域、そして河内長野市を含めた地域を横断する形で地域設定をしたエコミュージアム構想である。これには現在の文化財政策の点からも多に有効な考え方になっていると以为いいだろう。

現在の日本の文化財政策は2011年ぐらいから自民党によって経済効果、観光資源として

の文化財、博物館の位置づけが強まっている。これは日本の世界遺産登録が始まった1993年以降、内外の観光客が世界遺産を目当てに押し寄せてくる状況が大きく文化財の政策に影響を及ぼしたといえる。それが経済的、観光的な面だけでなく、日本の深刻な人口減少が地域を支える人材を減らし、更なる過疎化が進んでいる現状から、地域のまちおこし、まちづくりにも資するように文化財や博物館が文化財政策の中で位置づけられたのであろう。そういった中で文化審議会文化財分科会企画調査会が提唱した「歴史文化基本構想」が出され、「文化財建造物、史跡、博物館や伝統芸能等の各地に所在する有形・無形の文化芸術資源をその価値の適切な継承に配慮しつつ、地域振興、観光・産業振興等に活用するための取り組みを進める」こととされた。地域の自治体は「文化財保存活用大綱」「文化財保存活用地位計画」の策定を求められている。以前であれば、国や自治体による指定されていない文化財には言及されてこなかったのが、このことにより、文化財の指定がなされていないものも含めて、観光事業ということだけでなく、地域において総合的な位置づけを行うことで地域づくり、地域振興につなげていくこととなった。この考え方はエコミュージアムの思想にも大きく通じる。また2020年まで募集された「日本遺産」も同様である。

その点から行けば、いずみエコミュージアム構想というのは泉州地域における一つの文化財、博物館の活用として現在の日本の政策とも合致するものと言えよう。地域における文化遺産の活用をエコミュージアムを通じて行い、大学の博物館学芸員課程において地域住民と共同でまちづくり、コミュニティの再生を行うという点で本学の教育面でも資することができるのではないだろうか。そのリーディングケースは先述の東海大学の博物館学芸員課程と神奈川県平塚市の金目エコミュージアムの活動が参考になるだろう。このケースについては現在、進行中の本プロジェクトで調査を先日終えたところなので、その成果論文でまとめることにしたいが、ここでも萩での事例と同様に地元住民の方の熱心さ、地元愛を非常に感じさせる解説など、人という資源の大切さを感じた。ただこれがこの後の世代に引き継がれていくのか、が問題になる。これまで筆者は大学院生のころから見てきたエコミュージアムは、熱心に活動を推進してきた世代がリタイアしたり、亡くなられたりした後に、後の世代が引き継いでいけず（いかず）、その地域での活動が消えていった例が数多くあった。今からでは遅きに失しているのかもしれないが、本学の（博物館学芸員課程も含めた）教育において人材を養成し全国に供給していく、それを泉州という地域で実践していくことで本学の地域貢献ともなるのではないだろうか、という考えに至った。今後はこれまでの各個の調査を分析して、具体的な教材を考えていくことにしたい。

本稿は【20連279】「地域文化財の掘り起こしと活用の研究」の成果論文である。

(2023年12月3日受理)

## The Contributions of Momoyama Gakuin University from the Viewpoint of Cultural Resource Management

INOUE Satoshi

Universities in Japan are subject to international competition in terms of research and education. Therefore, we at Momoyama Gakuin University also have to do more. However, Japanese students tend to dislike studying about Japanese and world history. This research project will report our research on cultural resource management in 2020-2023, and consider incorporating these findings in the education system.